

世代社会関係の概念を構築する —母の位置はどこにあるのか— (その1)

棚 沢 直 子

はじめに

- I. 世代関係の諸特性
 - II. 世代間の力関係における母の位置
 - III. 世代社会関係から見た市民権
- おわりに

はじめに

現代の少子高齢化は、日本社会が取り組むべき大きな問題である。この問題を根本から問い直すためには、人文科学・社会科学を横断する新しい研究分野：「世代社会関係」の構築が急務だと思われる。

日本では世代という語は社会科学ですでに頻繁に使われている。たとえば、1980年代のフェミニストたちは60年代から始まった核家族化を E.ショーターの『近代家族の形成』(ショーター [1987]) に倣って日本の「近代家族」の誕生と称したのに、その他の社会学者たちは「二世家族」化と呼ぶのが慣わしだった。世代という語はもともと日本ではなじみ深かったからである。ただし、世代をひとつの社会関係概念として理論構築する試みは、私の知る限り、これまでなかった。

これに対し、私の専門領域であるフランスでは、核家族を日本のように「近代家族」とか「二世家族」と命名したことは一度もない。核家族は「夫婦家族」(famille conjugale) とか「カップル中心家族」(famille centrée sur le couple) と同一視するのが通例である。世代という語がフランスの社会科学分野で分析概念として使用されることはなかった。少なくともごく最近までは(たとえば Attias-Donfut[1995])。フランスでも少子高齢化は現代の社会問題であるのに、いまだに世代を中心概念として理論構築する試みはない(コラン [2002]) (1)。

というように、日本でもフランスでも、世代は人文科学・社会科学において概念用語として成立していないし、ましてやその理論構築は一步さえ踏み出されていないのである。日本では世代の語が使用されていながら、それを学問的に理論構築して日本から発信する意欲はないし、フランスで

は世代関係は男女関係の背後に隠れて思考されていないからだ。

フランスでは家族について男女関係を中心に、日本では世代関係を中心に考察する。そうしたちがいの意味するところを視野に入れつつ、フランス系で人文科学系の私が、この未開拓な世代関係の理論構築に一步踏み出せないだろうか。私が今のところできるのは、フランスで展開されてきたこれまでの社会関係理論の中に、世代を位置づけつつその概念化の糸口を探ることではないか。手始めに世代関係の諸特性の考察を男女関係との比較から試みてみよう。

I. 世代関係の諸特性

フランスの社会学系フェミニストたちの間では、1980年代から英語圏のジェンダー研究に代わって「性社会関係」なる用語で男女関係を理論化する動きが盛んになった。その最初の成果は共著『性社会関係について、理論構築の行程』(Battagliola[1986])にまとめられている。この本は、フランスのウーマン・リブから始まるフェミニズムの理論構築がマルクス主義の階級理論を出発点にしたこと、以後15年の行程があることを明らかにし、その延長上に性社会関係の理論化がされるだろうと表明している。日本にも紹介されたクリスティーヌ・デルフィーの理論はこの行程の中に位置づけられている。

では、この本によれば、階級と性に共通するところは何なのか。次の3点に要約できそうだ。

第1点。階級も性も、実体ではなく、関係の中でしか存在しない。

第2点。階級も性も社会関係である。この本は、男女関係が自然(生物的)にできたのではないことを論証するのに、全ページの3分の1を費やしている。

第3点。階級も性も、力関係、権力関係であり、支配抑圧関係である。男女は平等であるべきなのに、歴史的に支配抑圧関係の中におかれてしまったと。

このように論じたのち、男女がこの関係からどう脱け出すかの方法論を展開していく。それは、男女という二項を明確に分化し、この二項の関係を対立矛盾と捉え、ここから支配抑圧関係が崩壊するような社会変化を探っていく方法論である。

さて、この本では世代関係はほとんど言及されていない。フランスの社会科学分野で世代という用語が使用され始めたのは1992-3年だから、この本の問題意識の中に世代概念がないのは当然である。よって、ここからが私自身の分析の試みとなる。

世代には、性や階級と共通するところはあるのか。私の答えはイエス・アンド・ノーである。

まずイエスのところ、それは第1に世代こそが関係の中でしか捉えられないこと。子どもは大人との関係によって初めて子どもとされる。第2に、世代は、年齢に関わるから男女よりもさらに自然的なものと思われがちだが、社会の中でこそ考えるべきであること。世代について生物学的に見るところは、必ず社会的な解釈がされているからだ。これは男女関係の解釈が歴史的に辿った行程

を反芻すればよくわかる。

ところで、世代もまた階級や性のように力関係、権力関係で成り立っているのか。私はそう思う。これが第3の共通点である。事実、最近ようやく発展し始めたフランスの世代研究においても、「世代間には次第に葛藤が浮上し始めている」(Bihl[2004], p.33)との指摘がある。とくに労働市場において、30-50代の年齢層と30歳以下および50歳以上の年齢層との間には、失業率や賃金の不平等があり、それが現実的と言わないまでも少なくとも潜在的な世代間の葛藤を引き起こすというのだ。また、福祉の分野でも、少子高齢化にともない、年金システム上で世代間の利害が次第に激しい葛藤を生むだろうと。こうしたことから、世代間の力関係が垣間見られるというわけである。

しかし、この研究を詳細に読むと、世代間の力関係が引き起こすだろう葛藤は、今のところもっぱら労働市場や年金システムなど公領域のみに関わっている。ところで、公領域とくに労働市場においては、失業に関して不平等があってはならないし、仕事の内容が同等のとき賃金も平等にすべきだという原則は当然ある。それなら世代間に何らかの不平等があれば、性や階級の問題と同じような二項対立の方法論でその解消を図ってよいということになる。

では、私領域(家族領域)で、同じことが言えるのか。そもそも私領域における世代間の力関係はこれまで思考されたことがあるのか。世代が性や階級と基本的にちがうところは、もしかしたら私領域において初めて見えてくるのではないか。世代関係の諸特性のもっとも重要な部分は、この領域でより明確に分析できるのではないか。

まずフランスの最近の研究から私領域における世代関係がどう考察されているかを検討してみる。予想していた通り、世代間の力関係から生ずるはずの葛藤の問題について、どの研究も沈黙を守っている。あたかも私領域では世代間の葛藤はないかのように。あたかも世代間の平等の問題は考える必要がないかのように。ここにあるのは、ただ家族における世代間の「連帯」(solidarité)の現状分析である(2)。「一方では若い世代が労働市場に参入するとき直面する困難さに対して、親世代が援助を申し出ること」、「他方では親世代の高齢化に伴って生じるさまざまな問題を、子ども世代が親世代とともに解決しようとする事」(Bihl[2004], p.32)の増大が指摘される。少子高齢化の問題は、「家族の連帯」(solidarité familiale)とか「家族ネットワーク」(réseau familial)を唱えれば、それで済むかのような。頻繁に使用されるこの「連帯」なる概念の裏に、何か隠されているのではと私には思えてしまう。

この「家族の連帯」についてもっと詳細に見ていこう。「家族の連帯」とは具体的に何を意味するのだろうか。それはまず「援助」にまつわる「相互依存関係」のことをさすようだ。この関係は「贈与(don)とそのお返し(contre-don)の論理で成り立っており、それは物質的な財や世話などの交換だけでなく愛情の流通にも関わる」(Bihl[2004],p.40)という。ただし、こうした贈与とお返し論理は「時間により媒介されるから」、「お返しはずっと後になる」(同ページ)ことが多いと。

それなら、私に言わせれば、お返しは不確かである。まずは自分のした贈与は無償だと、報われるのは当てにしないと思っておく方がいい。

とすれば、次のように言えるのではないか。私領域において世代間の「援助」は相互ではなく一方通行的な行為である。子どもの世話、高齢者の介護は一方通行でされる。フランスの最近の研究で相互とされた依存は、それを実際に生きてみれば、非相互である。なぜなら、世話や介護を提供する側は一人でも生きられ他者に依存しないのに、提供される側は一人で生きられず他者へ依存しているからだ。世代間の援助は即時には相互交換できないものである。

「家族の連帯」の美名で隠されたものは、まさにこの即時の相互性のなさ、そして将来における互酬性の不確かさである。暗黙の了解事項として、家族領域での力関係は語らない、世代間の平等問題に触れないのは、私領域での世代関係が何よりも非相互な依存という不平等のうえに築かれているからだ。この「非相互で不平等な依存性」が、私の思う世代関係の第一の特性である。この依存性により、世代関係は性関係や階級関係と根本的に袂を分っている。

世代間の力関係の中にある動性は、性や階級にあるそれとはちがう。というのも、性や階級の力関係にあっては強者が弱者の労働《力》を搾取することで不平等が生じるのだが、世代間の力関係にあっては強者（より弱者でないもの）が弱者に労働《力》を提供することで、もともと不平等な関係を少しでも平等へと近づけるような動性だからである。よって世代間の力関係の問題は性や階級と同じ方法論では解決できない。

ところで、生きることに必ずや介入する時間の問題が、この世代関係を流動的にしている。人間はすべて、精神的にも身体的にも世話してくれるものに完全に依存するかたちで生まれてくる。しかし、生きる間に次第に自立性が獲得される。場合によって老いとともにより自立性は減少するかもしれないが。こうした「依存・自立の流動性」が性関係や階級関係とはちがう世代関係の第二の特性である。この流動性により、長い目で見れば、世代間の連帯が生まれるのかもしれない。しかし、前述したように、時間には不確かさがつきまとうから、その相互性は完全には保証されないのである。

以上述べた世代関係の二つの特性は、最後に指摘する第三の特性へと流れこんでいく。すなわち、世代は、性や階級のように水平関係で成り立っているのではなく、「時間により媒介される垂直性」の関係だということである。この根本を把握しておけば、「贈与とお返しの論理」は水平関係についての思考が基本にあって生まれたのもで、垂直関係への応用には限界があるとわかるだろう。「垂直性」という世代関係の特性から分析を始めるのが、世代関係の概念構築の出発点にふさわしいと私は思う。

一般的に言って、世代に関わることを考察するときは、日本でもフランスでも「継承」だけが問題になる。その典型例が社会学者ピエール・ブルディューの父から息子に継承される「象徴資本」である(3)。この場合、「継承」とは同じものの「再生産」の意味にしかならず、「世代」は「系譜」の別名になってしまう。

フランスのフェミニズム理論においても、世代について言及するときは、決まって男女の不平等を再生産する媒介の意味で論じられている。この文脈では、世代間の「伝達継承」(transmission)は「文化的な惰性の原理」(Bihl[2006], manuscrit p.7)に支配されるということになる。世代継承は「停滞」(stagnation)の意味でしか使用されていないのである。

しかし、世代間における垂直な時間性をその全体において考察するなら、伝達継承と等価値と思えるもうひとつの要素:「変遷」「変化」に目を転じないわけにはいかない。

そもそも世代と訳せるフランス語「génération」にはさまざまな意味がある。現在のところこの語が頻繁に使用されるのは、「filiation」の意味としてであり、「filiation」は「親子関係」とか「系譜」と訳されることが多い。社会学の分野では、世代は「classe d'âge」(年齢層)の意味で使用される。しかし、「génération」の第一義は、ロベール辞典やラルース辞典によれば、まったく別のところにある。それは、社会科学の分野で忘れ去られてしまった「生産、生成、形成、創造、革新」と訳せるような意味である。まとめれば、フランス語の「génération」とは、「親子関係」や「系譜」による伝達継承の関係であり、と同時に年齢層を次々と生きる過程で革新が導入される関係でもあると定義できよう。世代関係には変遷、変化、新しさなどの要素が入り込むのを忘れないようにしたい。哲学者フランソワーズ・コランは、この「innovation」(革新)の代わりに「novation」の語で世代を説明している(Collin[1999],p.208)。「novation」は現在では「更改」という法律用語としてしか用いられない。つまり「既存の債権を消滅させ、これに変わる新しい債権を成立させること」だそうだが、コランは広義に解釈したのだ。ここでは「書き換え」とでもひとまず訳しておく。世代という日本語は、おそらく翻訳語だろうが、フランス語にある第一義を完璧に落としたかたらずで成立してしまった。

世代間の垂直な動性をさらに具体的に考察してみよう。人間が誕生するときは完璧な依存状態にある。世話する側からの労働《力》のすべてを受容するせいで、伝達継承はそれと気づかないほど滑らかにされていく。しかし、この受容の中に伝達継承の「書き換え」(novation)がすでに萌芽として生まれている。世話する側から自立するにしたがって、この「書き換え」の度合いが増大していく。つまり、世代間の「垂直性」においては、伝達継承の只中で革新が行われ、連続の只中で非連続が生まれるのである。こうした時間性においては、伝達継承は単なる再生産ではなく、世代

は単なる系譜とは限らず、贈り物は必ずお返しされるとはいえない。贈与とお返しの論理で世代関係の全体を説明するには限界がある。

世代の時間の特性は何だろうか。時間性といえば、ニーチェ以来のフランス思想において、直線のか円環的かのふたつしかない相場が決まっている。現代の思想家ジュリア・クリステヴァは、これらのニーチェ的時間性を男女に振り分けて、直線的が男の時間、円環的が女の時間とした（クリステヴァ [1991] , pp.115-152）。世代の時間性はどちらに属するのか。私から見ると、それはどちらにも属さない。直線的でも円環的でもないし(4)、もちろん停滞などしていない(5)。それはゆっくりと着実に進んでいく。近くから見れば螺旋的に、遠くから眺めれば垂直に(6)。

少子高齢化における社会変化の取り組みには、世代関係の考察が急務である。フランスで男女関係の概念化はこの30年間に飛躍的に進んだが、世代関係の研究はようやく始まったばかりだ。その世代分析の方法論は今のところふたつしかない。公領域において世代を潜在的な葛藤の関係と捉えて二項対立の論理で処理する方法論、私領域において連帯という名の「相互性(互酬性)」（どちらも *réciprocité*）の論理を使用する方法論である。これらは、私に言わせれば、水平関係の分析からの応用でしかない。世代関係における変化の分析には、西洋理論が脱け出せない二項対立とか相互性以外の論理を創造する必要がある。世代関係の研究は日本でこそまず発展してほしい。世代という螺旋的で垂直な動性の中で生まれる変化を分析する方法論が、日本で思考できないものだろうか。

世代関係の諸特性の考察から、次の3点をここまでの結論として挙げておく。

1. 家族社会学も含めたほとんどの社会科学の分野で、「依存者たち」は無視されてきた。彼らの存在に照明を当てる必要がある。「標準化」(normalisation)を志向する社会福祉の分野は唯一の例外かもしれない。それでも子ども、障害者、高齢者などにある「他者に依存しなければならぬ部分」と「彼らを世話する者たちの社会的な位置」とを十分に考慮しているとはとても思えない。日本であれフランスであれ現代社会は、「依存者たち」の大部分を労働市場などの公領域から追放することで成立している。西欧的な個人の概念は彼らの存在を無視している。フランスの「人間と市民の権利宣言」では「人間は生まれながらに平等で自由である権利を有する」と謳われた。たしかに「権利」としてはそうかもしれない。しかし、精神的に身体的に他者に依存して生きる者たちにとって、この自由と平等の権利の大部分が現実生きる中で阻害されているのである。これは「依存される者」についても同じである。よって依存される側にもより一層の照明を当てなければならない。
2. 世代関係はそのかなりの大部分が援助の需要と供給との動性のうえに築かれている。世代間の力関係が、強者による弱者の労働力の搾取でなく、より弱者でない者への弱者の依存に則つ

ているなら、この力の供給は、「依存者たち」が「標準化」(normalisation)の状態に置かれ、「標準者」(何という表現!)とより平等になるために、必要なものである。ここから、水平関係における不平等の告発に終始するのではない新しい方法論の必要性が出てくる。その方法論の出発点は、世代関係が依存と不平等で成立しているのをまず認めることにある。長い時間の流れを考慮すれば、世代関係では力の逆転の場合もあるほど状況が変わる。この流動性の考慮も世代関係を解明する方法論には必要である。

3. 世代関係の諸特性を分析すれば、〈私〉と呼ばれる領域がどれほど社会的であるかを理解できるようになる。私領域は〈公〉と等価な社会領域と考える必要がある。フェミニズム理論の功績のひとつは、西欧近代に公私が分離したときに、私領域に閉じ込められた女の問題を社会の中に引きずり出したことだろう。私領域に閉じ込められたのは男女関係だけではなく。世代関係は、男女関係とちがって、現代の西欧理論において相変わらず私領域の中に捨てられ無視され続けている。「依存者たち」の多くはいまだに公領域には存在していない。あるいは存在しても「他者に依存する部分があるひと」として理解されていないし、その背後にいる「世話するひと」の存在も明確に意識されていない。せめて「依存者たち」と「依存される者たち」を社会的な存在として考慮しようではないか。そのために、私は世代関係を世代《社会》関係と呼び、その概念構築の必要性を提唱していきたい。

(つづく)

注：

- (1) コラン [2002] の発表で、彼女は世代問題への取り組みについて「これまであまりにも消極的なものが多すぎた」(p.11)と指摘し、「世代関係をどう考えるか」は21世紀冒頭の問題だとしている(同ページ)。さらに注で「女性運動と親子関係の劇的な変化との相互影響について、私の知るかぎり、信頼できる研究が欠如している」(同ページ)とも言っている。
- (2) 1995年出版の大著 Attias-Donfut[1995]の書名は『世代間の連帯、老い、家族、国家』であり、家族とくればフランスでは今のところ「連帯」以外の考察はありえないらしい。
- (3) 佐々木 [2002] においても、「発題を受けての討論」の中で随所に「世代継承」問題の分析の必要性が述べられている (p.47, pp.56-57, pp.81-82, p.87, p.91, p.105)。「世代」概念は「継承」の用語としか結びつかないようだ。
- (4) クリステヴァなら、世代の時間性を「反復性と永遠性 (…)、自然界のリズム、月経周期、妊娠期間、生物学的リズムの永遠反復」(クリステヴァ [1991], p.120)として、女の円環的時間と同一視するかもしれないが。
- (5) シモーヌ・ド・ボーヴォワールは日本も含めて非西欧の女性の歴史が「長く変わることのない」停滞の状

態にあると決めつけた（ボーヴォワール [1997], I .p.357)。これに対し、第二次大戦直前に日本で出版された公定本『国体の本義』では、西洋から後進的・停滞的と決めつけられないために、日本の時間性は、万世一系の天皇制からわかるごとく、建国以来「不変である」とした。停滞と不変はどこがちがうのか。私にはわからないが、『国体…』の著者たちは、不変という発想で、日本の時間性を時間そのものの枠外に設定しようとしたのかもしれない。

(6) 巨大な視野からすると、はるか遠くから眺めた垂直はさらに巨大な別の円環の中にあるのかもしれない。このような螺旋と垂直の戯れは永遠に繰り返され続けるのだろうか。

参考文献（abc順）：

- Attias-Donfut, Claudine [1995], *Les solidarités entre générations, Vieillesse, familles, Etat* (『世代間の連帯、若い、家族、国家』), Paris: Nathan.
- Battagliola, Françoise; Combes, Danièle; Daune-Richard, Anne-Marie; Devreux, Anne-Marie; Ferrand, Michèle; Langevin, Annette [1986], *A propos des rapports sociaux de sexe, parcours épistémologiques* (『性社会関係について、理論構築の行程』), Centre de Sociologie Urbaine, Recherche effectuée dans le cadre de l'ATP du CNRS << Recherches féministes et recherches sur les femmes >>, Décision d'aide no.955 - 260, réédition 1990.
- ボーヴォワール、シモーヌ・ド [1997]、『決定版・第二の性』Ⅰ. 事実と神話、井上たか子・木村信子監訳、Ⅱ. 体験、中嶋公子・加藤康子監訳、新潮社（原書は1949年出版）。
- Bihl, Alain [2004], "Le concept de rapports sociaux de génération: des présupposés à la problématique", *Les rapports intergénérationnels en France et au Japon, Etude comparative internationale* (『日仏における世代関係—国際比較研究』), Ouvrage coordonné par Alain Bihl et Naoko Tanasawa, Paris: L'Harmattan.
- Bihl, Alain; Pfefferkorn, Roland [2006], "Le Pouvoir domestique: sur la configuration actuelle des rapports de pouvoir entre femmes et hommes à l'intérieur de l'espace domestique", 天野千穂子・棚沢直子訳、棚沢直子編、『カップルのゆくえ』、明石書店予定。
- Collin, Françoise [1999], *L'homme est-il devenu superflu? Hannah Arendt* (『人間は余分なものになったのか？ ハンナ・アレント』), Paris: Odile Jacob.
- コラン、フランソワーズ [2002]、『対話的な普遍に向けて』、伊吹弘子・加藤康子訳、『女性研究における日仏比較、新しい比較方法論の必要性をめぐって』、1999-2000年度日仏会館との共同研究事業・石橋財団研究助成・日仏共同研究報告書、日仏女性研究学会、pp.8-12、原文 pp.58-62。
- コラン、フランソワーズ [2006]、『対話的な普遍に向けて』、伊吹・加藤・棚沢訳、棚沢直子・中嶋公子編、『フランスから見る日本ジェンダー史』、新曜社予定。
- クリステヴァ [1991]、『女の時間』、棚沢直子・天野千穂子編訳、勁草書房。
- 文部省 [1937]、『国体の本義』、文部省思想局発行。

佐々木毅・金泰昌編 [2002]、『公共哲学 4 欧米における公と私』、東京大学出版会。

ショーター、エドワード [1987]、『近代家族の形成』、田中俊宏・岩橋誠一・見崎恵子・作道潤訳、昭和堂、
原書は1975年出版。

Tanasawa,Naoko[2005], “Pour sortir de la logique des contraires—en partant des différences entre la France et le Japon”,
『経済論集』、東洋大学経済学部紀要、30巻3号。

棚沢直子 [2005]、「世代間継承と世代間革新のあいだで一日仏のちがいはどこにあるかー」、『経済論集』、東
洋大学経済学部紀要、30巻3号。

棚沢直子 [2006]、「『国体の本義』読解—西洋の世界性・日本の特殊性—」、棚沢直子・中嶋公子編、『フラン
スから見る日本ジェンダー史』、新曜社予定。

（この論考は、Tanasawa,Naoko[2004], “Conceptualiser les rapports sociaux de génération: quelle place pour la mère?”,
Les rapports intergénérationnels en France et au Japon, Etude comparative internationale, Ouvrage coordonné par Alain
Bihl et Naoko Tanasawa, Paris: L’Harmattan, pp.37-58 のうち、Introduction（はじめに）と I. Caractéristiques des
rapports sociaux de génération（世代関係の諸特性）pp.37-44の自由翻訳である。大筋の内容は同じでも、ほと
んど全文を書き換えなければ日本向けにならないことがよくわかった。それは、(1). 文法構成や単語の表現に
おいて日本語にふさわしい他の構成や他の単語にする。(2). フランス向けの問題意識は日本向けにはならない。
(3). フランス語で理論的な研究論文として書いたものは、日本語にするとその緻密さが重箱の隅をつつくよう
に思え、浮いてしまう。日本語では研究論文といえども、書物にしようとするときには、一般向けの書き換え
が必要である、などの理由による。しかし、うまく訳せたとはとても言えない。もしかしたら、フランス語で
書いたときにはフランス語の文法構成に助けられて、逆説的に論理的でなかったかもしれないとも思う。本稿
の続きとして、II. III. おわりに、が残っている。）